

つながって つながる

無限大の想像力





女性研究者 支援室

室長挨拶

法学研究科 教授
金澤 真理

大阪市立大学が平成25年度文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業（一般型）」の事業機関に選定され、女性研究者支援室が行う本事業の取り組みも2年目を迎えました。本事業は ①女性教員の積極採用および積極昇任 ②教育・研究環境整備 ③出産・育児環境整備 ④学内の意識改革 ⑤地域への貢献 ⑥キャリアパスの整備を柱としており、既に研究支援員の配置やネットワークシステムの構築によるネットワーク形成支援、セミナー、シンポジウムを通じた意識啓発活動等、ハード面・ソフト面双方の支援を実施してまいりました。

本年度の特筆すべき活動は、女性教員の採用・昇任促進のためのインセンティブ経費の新設、地域と連携した育児クーポンの発行・利用促進、めざましい研究成果をあげている女性研究者表彰制度の新設です。特に女性研究者表彰制度の新設は、戦後の物資不足の時期にひと一倍ご苦労をされて学問を修められた本学卒業生、岡村千恵子さんのご寄付によって実現したものです。先輩の精神を受け継ぎ、本学の女性研究者の活躍を再認識する機会となりました。

継続的に行っているセミナー等も新規の視点で実践を伴うワークショップ形式を取り入れ、学内外の専門の方との議論を深めることで内容の充実を図っています。また本事業の特徴でもあるネットワークシステムを活用して情報交換・共有を進めています。

いずれの活動も直接の支援対象は女性であっても、研究機関として的大阪市立大学が全体的に活性化することをねらいとしております。

教職員、学生をはじめとする皆様のご理解のもと、完成年度に向けて事業実施に邁進してまいりますので、どうかよろしくお願い申し上げます。

大阪市立大学の女性研究者支援事業は3年目へ

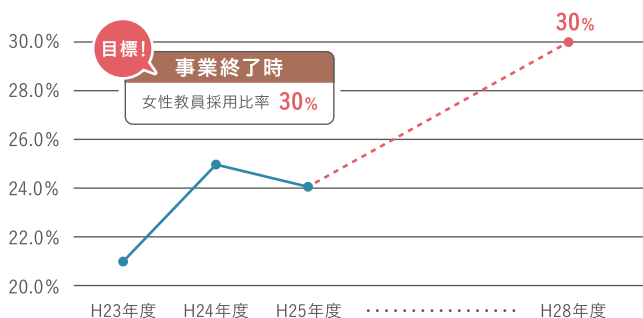
大阪市立大学では、平成25年に文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業（一般型）」の実施機関に選定されて以降、学内外のネットワークを有機的に機能させ、女性研究者研究活動支援事業を積極的に展開してきました。

平成27年度までに達成すべき具体的な目標をたて、女性研究者

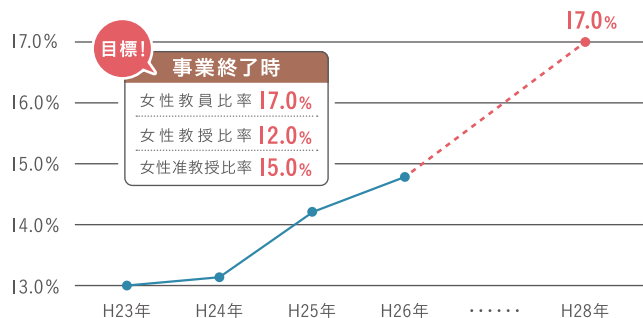
の積極採用、上位職への積極登用の事業に取り組んでいます。

今後も女性研究者が最大限に個性と能力を発揮できる環境を整備し、領域を超えた多層的で多様な研究ネットワークを形成することを目指しつつ、ワーク・ライフ・バランスと研究活動をサポートして参ります。

■ 女性教員の採用比率



■ 女性教員の在職比率(各年5月1日現在)



フライヤー アーカイブ セレクション

Flier Archive
Selection



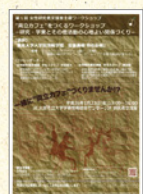
岡村賞



育児クーポン制度



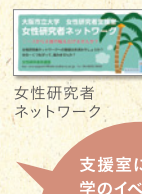
トップフォーラム



ワークショップ



研究者交流会



女性研究者
ネットワーク

支援室には他大学のイベントフライヤーもたくさん掲示しています。ぜひお立ち寄りください!

支援事業2年目の新たな取り組みを紹介

1 女性研究者への支援体制の確立

● インセンティブ経費

女性研究者支援室では、女性教員を新たに採用または上位職への昇任を決定した部局に対し、インセンティブとして本学独自の経費を配分する“インセンティブ経費”を設置しました。

本年3月現在、10件(採用4、昇任6)へ付与されています。

2 出産・育児環境の整備

● ワーク・ライフ・バランス

本年2月より女性研究者支援室サイトに「ワーク・ライフ・バランス推進支援ページ」を作成しました。男女共同参画の理念に基づき、女性研究者のワーク・ライフ・バランスにかかわる相談員を配置し、支援・相談だけでなくニーズや課題の把握にも活用していきます。

<http://www.wlb.osaka-cu.ac.jp/support/>

3 教育・研究環境の整備

● 女性研究者ネットワークシステム

研究者支援の情報網強化のため、人材データベースとしての機能を持つ“女性研究者ネットワークシステム”を開発しました。

このシステムにより、女性研究者へ研究支援員を適切に配置するためのマッチング作業を円滑に行うことが可能になりました。登録は性別不問で、女性研究者支援室からの情報提供と、研究者・学生の情報交換のためのSNS機能もあります。

本年2月現在の登録者数は、研究者・本学学部生・卒業生など約310名に上ります。

今後、本システムに備えたSNS機能を活用し、他大学とも連携を強化してさらに充実したシステムに強化させていきます。

<http://www.wlb.osaka-cu.ac.jp/>



4 意識啓発活動 ● 女性研究者表彰制度【岡村賞】

次世代の優秀な女性研究者の育成、継続的な研究活動の支援を目的として創設されました。副賞は本学の卒業生である岡村千恵子さんの寄付金から贈呈されます。岡村さんは昭和25年に本学の前身である大阪商科大学を卒業された大先輩で、当時男女共学になったばかりの大阪商科大学では稀少な女子学生でした。毎年候補者を募集して選考、表彰します。



岡村千恵子さん



平成26年度 顕彰式典での第1回岡村賞表彰の様子

5 次世代育成 ● 子育て中の女性研究者が紹介するキャリア形成セミナー

● 理系女子大学生による受験生進路相談 ● 学生企画の両立支援ワークショップ

『トワイライト・ダイアログ』 ～ロールモデル☆セミナー～

女性研究者を志す上で不可欠である、“時代と感覚にマッチしたロールモデル”を探るセミナーです。第1回は昨年9月10日(水)に開催しました。

参加者の声

- “ゆるい”ロールモデルは新鮮でした。
- 参与観察のような“技”についての、講師の発言に共感を覚えました！
- 私が普段感じていることを、講師が言葉にしてくださったように感じます。



本年1月27日(火) 読売新聞朝刊「WOMEN&WORK」～両立ナビ～の誌面に、“女性研究者の支援策の例”として本セミナーが取り上げられました！

『両立カフェ』をつくるワークショップ ～研究・学業とその他活動の心地よい関係づくり～

“研究科博士課程の大学院生兼3歳児の母”と“経営戦略とデザインを学ぶ商学部3年生”である女性研究者支援室学生スタッフ二人がファシリテーターとなり、本年1月23日(金)に開催しました。(本誌5ページの記事もあわせてお読みください。)



私の子育てとワーク・ライフ・バランス

My child care and work-life balance

「ライフ」と「ワーク」の調和を考えることは、あなたの人生を考えること。

特に子育て期は、このふたつのバランスを取るのが難しいと言われています。

子育て期の「ワーク・ライフ・バランス」を、素敵にデザインする方たちにインタビューしました。

Interview 01 “女性が輝く社会”の今こそ 子供の身になった女性支援が必要

文学研究科・文学部国語国文学専修 准教授

おくの くみこ
奥野 久美子さん

【プロフィール】

京都大学文学部卒業。平成17年博士学位取得(文学)。別府大学、京都教育大学を経て、文学研究科・文学部国語国文学専修准教授に就任。専門分野は日本近代文学。平成26年6月から女性研究者支援員制度を利用。

頼れる人がいない場所で 仕事をやめるべきか悩む

私は高校生の頃から芥川龍之介が好きで、夢が叶って今の研究職に就くことができました。でも、育休中に一度、仕事をやめようと思ったことがあります。当時は九州の大学に勤めていたんですが、頼れる人がまったくいない場所で、夫との別居からひとりで子育てしなければならないことに。本当につらくて、今思えば、産後うつだったのかもしれません。大学をやめて実家のある関西に戻りたいと研究者の先輩に相談したら「絶対にだめ。一度手にした就職先は手放してはいけない」と言われました。また、一番身近な先輩ママでもある姉には「子供はいつか親の手から離れていく、そうなった時、あなたが仕事

をやめていたら何も残らないよ」と。結局は京都の大学に勤めることが決まり救われたのですが、この2人の意見をもらい、私ひとりでも残って子育てする心積りでした。

そこに行けば何か 解決策がもらえる

女性研究者支援室に期待することは、当時の私のような悩みを持つ人に、様々な経験を持った人がアドバイスや解決策をくれること。子育てと仕事で悩んでいる時、本当に頼れるのはそのような意見です。また、“女性が輝く社会”が推進される今、子供が置き去りにになっていないか心配です。親が忙しくて一緒にいる時間が持てないと、子供は目に見えて不安定になるんですよ。子供の身になった女性支援に期待します。



ちよう らく
支援員 張 楽さん

空き時間を利用してサポート 私の研究にもメリットがある

大学院で指導を受けている奥野先生から紹介されて、支援員制度に登録しました。主な支援内容は、ノートに手書きされた論文の資料をデータ化すること。今は週に1、2時間くらい、空いた時間を利用して自分のペースで作業しています。日本の近代文学と

いう私の研究テーマに関わることなので、大変メリットがありますし、支援員を始めてから先生とよりコミュニケーションが取れるようになりました。子育てしながら、研究し教鞭をとっている先生を、同じ女性としても尊敬しています。

支援員メッセージ



Interview
02

周囲に支えられて研究に復帰 子供がいるから頑張れる

理学研究科生物地球系専攻 研究員
やました かわの えみ

山下(川野) 絵美さん

【プロフィール】

奈良女子大学大学院人間文化研究科修了。博士(理学)。一貫して、脳内器官での光受容の研究に取り組む。日本学術振興会の特別研究員(DC2)、同特別研究員(PD)、育児による研究中断の経験者を対象にした特別研究員(RPD)に採択。平成26年度岡村賞博士研究員奨励賞受賞。

1年半の産休・育休から 研究職に復帰

博士課程の3年時に結婚して、大阪市立大学に籍を移した後、妊娠出産。約1年半の間、産休・育休を取りました。私の研究は、手を動かすことが主なので、産休・育休中は自宅でデータをまとめた程度で、ほぼ研究から離れていました。復帰が決まってからは、指導教官の寺北先生によくディスカッションしていただき、研究者の頭に戻すことができました。

バランスを保てるのは 周囲のサポートのおかげ

ライフワークバランスは、私自

身うまくできているとは思いませんが、なんとか前進できているのは、周囲のサポートのおかげ。私は周りの人たちに恵まれたから今のバランスを保てていると思います。京都大学で助教をしている夫は、研究分野も近いこともあり、復帰についても非常に理解がありました。自宅が京都なので、子供の世話については朝の支度と緊急時は夫、保育園からの帰宅後、病気をした時は私が主に看病する、と分担。特に女性研究者の出産後の復帰は難しいことが多いですが、子供ができたからこそ、頑張れると思って日々研究と育児に取り組んでいます。



Interview
03

必要なのはライフステージに応じて 家庭と仕事のバランスをとること

大阪市立大学医学部附属病院 看護師
ふるやま よういち

古山 陽一さん

【プロフィール】

平成26年より大阪市立大学大学院修士課程在学中。自身の育休取得の経験からNPO団体「パパの育児休業支援センター」を立ち上げ、病院勤務を続けながら男性の育児参画をサポートしている。平成25年より大阪市男女共同参画審議会委員も務める。

まだ取得率の低い 男性の育休申請

私は娘の出生時に約1ヶ月育休を取得しました。看護職として、育児は夫婦で分かち合うべきものとの考えからだったのですが、本学に勤務する男性の育休取得は私が初めてでした。現在、男性の育休取得率は2%程度。まだまだ社会的には理解されにくい現状ですが、厚労省の調査では約3割の男性が育休取得を希望しており、「パパの育児休業支援センター」でも育休が法で定められていることの説明や労働局への橋渡し等を行っています。

周産期の夫婦関係が 長い人生において重要

家庭と仕事は、常に一対一を持続させるのではなく、ライフステージに応じたバランスの取り方が必要。特に、男性にとって周産期の妻との関わりは、その後の夫婦関係に大きな影響を与えます。この時期、家庭の比重を高めることが、長い人生においては有益であるということを社会に浸透させていきたいのです。父親が育児に取り組みややすい環境作りに向けて、今後も看護職として発信しつづけたと思っています。



“両立カフェ”をつくるワークショップ

平成27年
1月23日(金)

～研究・学業とその他活動の心地よい関係づくり～

ワークショップという手法は、研究者の抱えるリアルなニーズの声を拾い上げるため、また、対面交流の場を提供することで女性研究者支援に関心を持つ人同士のつながりを作るためにも有効です。

このワークショップでは「環境(場)」にフォーカスして、「大学内に



自分の両立したいことを紹介する澤田さん

に架空のカフェを作る」というテーマのもと、レゴブロックを使ったワークをととして、環境作りによって両立したいこと同士のジレンマ解消のヒントを探りました。

「家事の中でも、特に料理をしないと罪悪感がある。」「育児などは、当事者だけが話しあっても解決しない問題が多い。」「当事者以外とも話し合いができる場がほしい。」

さまざまな意見交換をしながら、グループごとにレゴブロックを使って実際に“両立カフェ”をデザインしました。



ファシリテーターをつとめる中田さん

〈女性研究者支援室学生スタッフ〉

澤田 彩さん 経営学研究科後期博士課程2回生

ワークショップという手段を用いた課題解決について難しいながらも手ごたえをつかむことが出来ました。これからは女性研究者支援という正解のない課題を考え、課題解決に向けて取り組んでいくうえでワークショップを積極的に取り入れていきたいと思います。

〈女性研究者支援室学生スタッフ〉

中田 智大さん 商学部3回生

ファシリテーションの難しさを痛感しましたが新しい分野を開拓できました。勇気ある一歩を踏み出したという感じで、新鮮な体験ができたなと思います。試行錯誤、少しずつ経験を重ねてリファインして自分のものにできたらよいなと思いました。



※このイベントは「次世代の研究者育成・啓蒙活動のためのワークショップデザイン研修会企画」に基づき開催されました。

女性研究者支援室 トップフォーラム 女性の活躍と大学マネジメント

平成27年
2月16日(月)

～ダイバーシティの潮流の中で～

ダイバーシティ時代において女性の活躍が大きな鍵を握る今、先進的な取り組みをしている大学や企業の方々をお招きし、講演や事例報告をもとに今後の大学マネジメントのあり方を考えました。

【基調講演】「女性の活躍」と「ダイバーシティ」

一般財団法人ダイバーシティ研究所 田村 太郎 代表理事

数年前までは名刺交換の際によく「海に潜る人ですか？」と尋ねられたのが、最近では「やらなければいけないことですけど、まだ出来てないのです」に変わり、時代の流れは感じるものの、「ダイバーシティ概念」をもっと普及させる必要性があると思われるとのこと。その必要性を“HOW”ではなく“WHY”に視点を置いて紹介されました。

ワーク・ライフ・バランスの発想を変える点や、今後の日本の人口構成と経済情勢の実態まで及んだ講演は田村理事の実験の経験とユーモアを交え、今までとは違った働き方や暮らし方の多様性を提案されました。

【報告】大阪市立大学の取り組み

女性研究者ネットワークシステムの活用

本学女性研究者支援室チーフコーディネーター 西岡 英子

本学が開発した女性研究者ネットワークシステムは学外からも注目を浴びており「先駆的で高く評価できる」という外部評価集計書からの報告がありました。

【パネルディスカッション】

●九州大学・女性の活躍促進の取り組み 九州大学 菊川律子前理事

●大阪ガス(株)のダイバーシティ推進について

大阪ガス(株)田畑真理ダイバーシティ推進チームマネジャー

●管理職にどう働きかけるのか？神戸大学の取り組み

神戸大学 朴木佳緒留教授・学長補佐

【ファシリテーター】本学女性研究者支援室室長 金澤 真理

フォーラム後半は上記報告をされた3名様に加え、パネリストとして田村代表理事にも登壇いただきました。金澤ファシリテーターからの「女性研究者の採用数値目標を立てることのデメリットと課題は何か」との問いかけに、菊川前理事からは「ない」、朴木教授からは「状況による」との回答がありそれぞれ討論する中、田畑マネジャーからは「企業では性別による募集はできないので羨ましい」との意見も出ました。管理職への働きかけとしては「現状の見える化」が大事で、世界的なデータと自大学とを比べた差を見せ「ひたすらお願い路線」です」と語る朴木教授でした。

次世代育成の工夫やネットワーク作りの大切さ、「手段と目標は使い分けなければいけない

こと」「数値目標は“手段”であること」などが指摘され、大学・企業それぞれ現時点での取り組みが今後につながる重要性を認識した討論会でした。



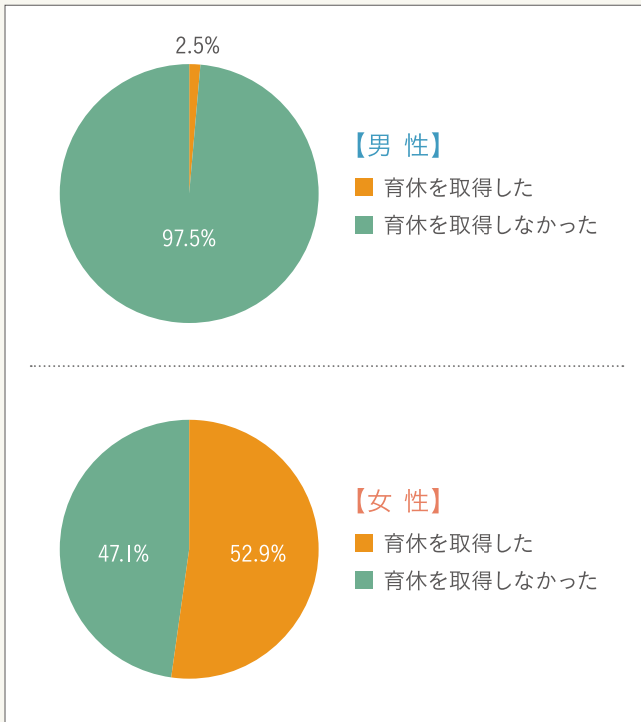
右から朴木教授、田畑マネジャー、菊川前理事、田村代表理事、金澤室長

データで見る、大阪市立大学研究者の育児・介護

女性研究室が行った「大阪市立大学研究者のワーク・ライフ・バランス等に関する実態調査」
(平成26年2月実施)で回収した316名について分析。

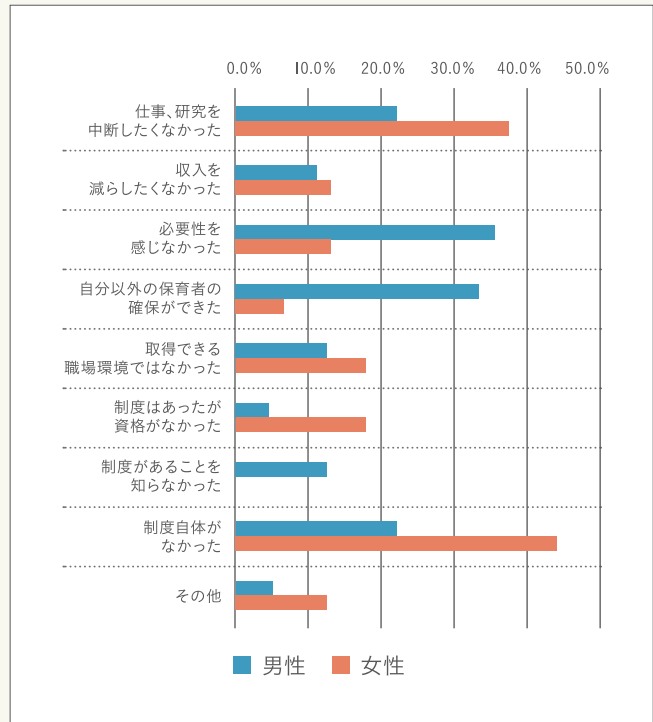
※研究者には、専任教員、非常勤講師、ポスдок、大学院生を含む。

■ 育児休業取得率(第一子育児時)



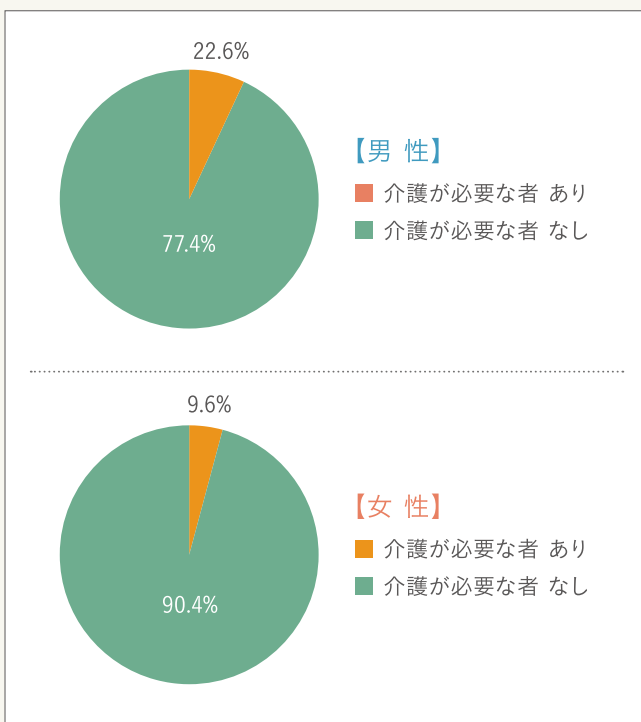
※第一子育児時、大阪市立大学以外に所属していた者も含む。

■ 育児休業を取得しなかった理由(第一子育児時)

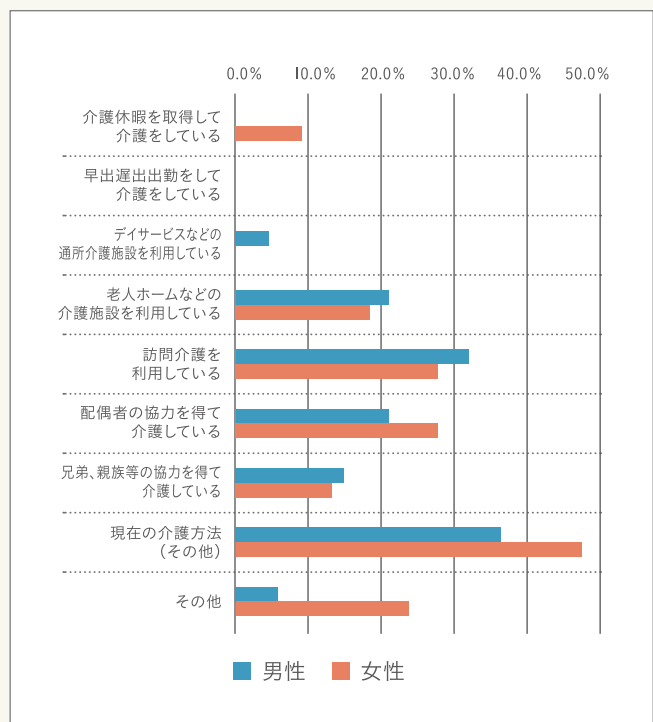


※第一子育児時、大阪市立大学以外に所属していた者も含む。
また、制度の有無は当時の状況である。

■ 介護が必要な者の有無(介護に携わる必要の有無)



■ 利用している介護方法



この書籍・DVD 紹介します!!

女性研究者支援室ではご紹介した書籍やDVDをはじめ様々な資料の閲覧や借用が可能です!
お気軽にお越しください!!



① 女性研究者とワークライフバランス (書籍)

仲 真紀子・久保(川合) 南海子 編 [新曜社]

自分の今や将来のワークライフバランスを考えたい研究者や学生にとって、かゆい所に手が届く1冊です。女性が仕事と家事・育児・介護等を両立することが珍しいことではなくなった現在、巷には様々な本が溢れています。「研究と育児の両立」の1つにスポットを当てても、各大学では専門性の高い研究と育児を両立する女性研究者やワーキングマザーに関する記事などがたくさん公表されています。これまで、主に時短家事の術や保育園事情など有益な情報は豊富でしたが、研究者という仕事(結婚・妊娠適齢期にパーマメントな役職に就いている可能性が高くない・土日に研究会や学会が入ることが多い・キャリアを優先すると配偶者と同居できないことが多いなど)と育児をいかに両立するか、人生設計をどう組み立てるか、パートナーとの分担をどう考えるかに至るまで踏み込んだ1冊となっています。

この本には、「研究と育児の両立」を経験した5人の研究者が、自らの経験談をありのままに綴られています。実際のところ、研究スタイル、立場、配偶者からその他周囲の環境など、取り巻く環境は、個人によって異なります。しかし、5人の研究者の体験談をもとにした具体事例は、自身のワークライフバランスについて迷ったときなど、参考そして励みになるバイブルとなります。ぜひ研究者や、研究者を目指す学生には、広く読んでいただきたいオススの1冊です!



② ジェンダーで考える教育の現在(書籍)

木村 涼子・古久保 さくら 編著
[解放出版社]

男女平等教育・ジェンダー教育をめぐる現在の学校教育の現状を踏まえて、新たなフェミニズム教育の可能性と課題を考察している1冊です。本学創造都市研究科の古久保さくら准教授の編著。



③ 親が参画する保育をつくる国際調査比較をふまえて (書籍)

池本 美香 編著
[勁草書房]

保育の消費者から共生生産者へ。保育士不足や予算制約のもとで保育の質を高めるために、親の力を生かす12カ国の政策動向を紹介しています。



④ アカハラで悩んだとき-あなたならどうする?- (DVD)

NPOアカデミック・ハラスメントをなくすネットワーク (NAAH) (企画・制作)

アカハラに悩むあなた、対応にあたる関係者の方々、さあどうしますか? アカハラに悩んだ場合、被害者はどのような行動をとるのか、典型的な3つの事例を紹介しています。



運営委員

宮野 道雄
運営委員長
理事兼副学長

金澤 真理
女性研究者支援室室長
法学研究科教授

石井 真一
経営学研究科教授

長尾 謙吉
経済学研究科教授

奥野 久美子
文学研究科准教授

大仁田 義裕
理学研究科教授

鍋島 美奈子
工学研究科准教授

新宅 治夫
医学研究科教授

佐々木 八千代
看護学研究科准教授

服部 良子
生活科学研究科准教授

村上 晴美
創造都市研究科教授

【女性研究者支援室スタッフ】

西岡 英子
チーフ
コーディネーター

山口 真紀
コーディネーター

我妻 優美
コーディネーター

阿久井 康平
コーディネーター

瀬川 公三洋
事務員

細谷 三千世
事務員

大滝(松田) 宏代
支援室スタッフ
複合先端研究機構研究員

山懸 弘子
支援室スタッフ

澤田 彩
学生スタッフ
経営学研究科
後期博士課程

高木 修一
学生スタッフ
経営学研究科
後期博士課程

中田 智大
学生スタッフ
商学部

角田 優子
学生スタッフ
工学研究科
後期博士課程

◆発行: 公立大学法人 大阪市立大学
女性研究者支援室

◆発行日: 平成27年3月

本誌に関するお問い合わせ・ご意見・ご感想は

大阪市立大学 女性研究者支援室
〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138
tel: 06-6605-3661
e-mail: ocu-support-f@ado.osaka-cu.ac.jp

本誌に掲載の写真および原稿の無断転用を禁じます。